知的障害児（者）に対する接触経験による偏見の低下 2

○岡部康成¹・齋藤雅英²
(¹ 浜松学院大学・² 相模女子大学)
キーワード: 知的障害児（者）、偏見、接触経験

The effects of contact with intellectual disabilities on prejudice
Yasunari OKABE¹ and Masahide SAITOH^{2#}
(¹ Hamamatsu Gakuin Univ. ² Sagami Women's Univ.)
Key words: Intellectual disabilities, Prejudice, Contact effect

目 的

知的障害に対する健常者の態度について、一般的で自己との関わりの薄い理念的観念の次元に相当する総論的態度は好意的であるのに対して、具体的で自己との直接的で具体的な関わりを含んだ各論的態度では否定的であることが指摘されている。加えて、態度の変容についても、総論的態度が比較的変容しやすいことに比べ、各論的態度は変容しにくいことが報告されている。この各論的態度の変容について、効果的な方法として接触経験が挙げられている。

そこで、保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する女子短期大学生を対象に、知的障害者への偏見の態度について施設実習前後に調査を実施し、実習において知的障害者等と協同作業等を通じた接触経験による知的障害者の偏見の態度の変容について検討した。

方 法

参加者 保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する女子短期大学 2 年生 126 名（平均年齢 19.68 歳，SD 0.51）を対象に調査を行なった。これらの参加者を、実習を行なった施設の種別に基づいて振り分けた結果、各条件群の参加者は、児童養護施設群 60 名、知的障害者施設群 49 名、統制群 17 名となった。

実施期間 2006 年、2007 年および 2008 年の 3 年間のそれぞれの 5 月および 6 月に調査を実施した。

手続き 保育士養成課程を持つ短期大学の保育士資格取得の必修科目である保育実習において、短期大学 2 年次に約 10 日間行なわれる施設での宿泊実習の開始 1 週間～2 週間前に知的障害者に関する質問紙調査を実施した。調査用紙は、町沢・佐藤・沢村（1990）が作成した精神障害者偏見尺度（23 項目）について、項目内の精神障害者と表記されている部分を知的障害者に変更したものを作成して用いた。回答は、各記述文に対してどの程度同意するか、「そう思わない（0 点）～そう思う（3 点）」までの 4 段階で評価させた。

実習終了から 1 週間後に再度同じ質問紙を配布し、同様の方法で回答させた。

結果と考察

齋藤ら（2009）で認められた「非ノーマライゼーション」と「接触回避」の主成分ごとに、条件群の実習前後の平均尺度得点を算出し（Table 1）、各主成分ごとに、実習先（統制群・児童養護施設群・知的障害者施設群）と実習経験（実習前・実習後）の 2 要因の分散分析を行なった。

総論的な態度である「非ノーマライゼーション」成分に関する分散分析の結果、実習経験の主効果（ $F(1,123) = 7.276, p < .01$ ）および実習先と実習経験の交互作用が認められた（ $F(2,123) = 7.490, p < .01$ ）。交互作用について単純主効果の検定を行なった結果、実習後における実習先の効果（ $F(2,246) = 6.915, p < .01$ ）および知的障害者実習群における実習経験の効果（ $F(2,123) = 7.490, p < .01$ ）が認められた。さらに、実習後における実習先の効果について多重比較（Ryan 法）を行なったところ、知的障害者施設で施設実習を行なった学生は、実習後に知的障害者に対する「非ノーマライゼーション」の態度が好意的に変化し、知的障害者に対する偏見の態度が低下したことが示された。

また、各論的な態度である「接触回避」成分についても実習経験の主効果（ $F(1,123) = 11.678, p < .01$ ）および実習先と実習経験の交互作用も認められた（ $F(2,123) = 3.404, p < .05$ ）。交互作用について、単純主効果の検定を行なった結果、実習後における実習先の効果（ $F(2,246) = 5.017, p < .01$ ）および知的障害者実習群における実習経験の効果（ $F(2,123) = 16.107, p < .01$ ）が認められた。さらに、実習後における実習先の効果について多重比較（Ryan 法）を行なったところ、知的障害者施設で施設実習を行なった学生は、実習後に知的障害者に対する「接触回避」の態度が好意的に変化し、知的障害者に対する偏見の態度が低下したことが示された。

これらの結果から、施設実習による知的障害児（者）施設との接触経験が総論的な偏見の態度だけでなく、各論的な偏見の態度の低下にも有効であることが示された。このことは、保育士養成課程における知的障害者施設における施設実習の教育的効果を示すものであるといえる。しかし、この実習による偏見の態度の低下が、どの程度の期間持続するのかといった問題や、実際の日常生活上の場面において行動として示されるのかといった問題については明らかではなく、今後の検討課題である。

引用文献

町沢静夫・佐藤寛之・沢村 幸 1990 精神障害者に対する態度測定—患者群、患者家族群、一般群の比較— 臨床精神医学, 19, 511-520.

齋藤雅英・岡部康成・杉山真人 2009 知的障害児（者）に対する態度構造, 愛媛女子短期大学紀要, 20, 71-79.

Table 1 条件群ごとの実習前後の平均評定値

実習先	非ノーマライゼーション				接触回避			
	実習前		実習後		実習前		実習後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
知的障害者	0.575	0.410	0.315	0.290	1.163	0.557	0.814	0.576
児童養護	0.610	0.361	0.529	0.374	1.098	0.504	0.969	0.481
統制	0.603	0.441	0.667	0.430	1.279	0.596	1.243	0.582